

習俗からみる人づくり

—柳田国男の所論の考察を中心に—

学校教育専攻
人間形成コース
片山純州

指導教官 木内陽一

1・研究の目的

戦後 60 年になろうとしている現在、毎日、新聞やニュースで痛ましい犯罪の報道が多々見られる。特に、過激な少年犯罪が目につくようになってきた。教育現場においても、一人一人の子どもたちに目を向けながらも、モラルの低下や価値観の多様化などに、十分な対応がしきれずにいるのが現状である。やはり、どのような人づくりをすべきかという問い直しの作業が必要であると考え。その方法として、「日本の過去の民衆史に立ち返る」というものである。これは近代以前に、郷党の習俗にみられる人づくりの実態を検証することである。習俗も、人づくりも、特定の時間と所の制約を受けたものであり、時の経過とともに移り変わるものである。その点を十分に認識した上で、常民の人づくりへの思いを表出することは、重要な視点である。

そこで、本研究においては、習俗研究の第一人者である、柳田国男 (1875~1962) の業績に注目をする。その理由として、一つ目に、明治生まれのエリートであるにもかかわらず、数少ない常民視点を持った研究者であり、彼の学問課題の中心に、常に常民を据えていることである。二つ目に、日本民俗学確立において、自己の学問を追及し解明する上で、近代以前の習俗研究は通過しなければならない課題であり、そのための膨大な資料を全国より集め、分析をし

て、客観的事実を提示している。三つ目に、多くの論稿を出して、研究の幅が大変広いことにより、多くの示唆と資料が得やすいことなどが挙げられる。

以上のことから、本研究では、柳田国男が行った習俗研究の所論を中心に据えて、近代以前の常民が営んだ人づくりについて考察する。そして、その考察から、柳田が習俗の中でつくられた常民に対して、どのような評価を持っていたのか、また、望ましい常民像をどのように描いていたのかを明らかにする。そこから、習俗研究の現在的意義を考え、現代の人づくりの示唆を得ることを研究の目的とする。

2. 論文の構成と内容

本論文は、四章の仕立としている。本論文の内容を概観してみると、以下に示すことができる。

第一章 柳田の習俗研究にいたる背景について考察する。なぜに柳田は、常民に目を向けて研究を行うようになったのか。また、習俗研究へと向かっていったのかを年譜から考察した。柳田の原点は、二つの故郷にある。西と東という風土も生活習慣も違う中での生活体験や知識が彼のその後の人生を決定付けている。特に「日本一小きな家」の出来事は、将来の民俗学に向かわせた理由としている。(第一節) その後の人生の中で、出会いや別れ、旅行による見聞、読

書で培った能力などを十分にいかして、日本民俗学の確立へとなる。これがまた、本格的な習俗研究への取り組みとなる。子どもの頃の原体験と漂泊的移住の中に、常民および習俗研究へと向かわせた背景のあることが明らかになった。

(第二節, 第三節)

第二章 柳田の習俗研究の所論から、郷党の人づくりの姿を明らかにした。郷党での人づくりの目標が「一人前」である。第一節では、「一人前」の規定として、成長と能力という二面から論じた。成長については、懐妊してから成年式に至るまでの間に、多くの関門と儀式を設けることによって、子どもの成長を確認し支援をしていく姿が明らかになった。また産土神や氏神の力をも借ることで、さらに力強い支援を得た子育てとなっていた。成長だけでなく能力も備えなければならず、男は力仕事の量、女は針仕事などの量などではかられる。この両面が揃ってはじめて、本来の「一人前」と認められる。第二節では、「一人前」として備えるべきマナーや知識の習得が、郷党の人々の智慧や工夫で行われていたことを考察した。共同体を維持するために、「群れ」の中で教育することが必要になり、子ども組や若者組などを作って、自治的運営をしていた。しかも、日常的に必要なことはシツケによって身につけていた。このシツケの方法も工夫があり、「笑い」を用いたり、「コトワザ」を用いるなど、あらゆる機会と場所において、智慧や工夫によって育む姿が明らかになった。

第三章 第二章を踏まえて、柳田が郷党の人づくりをどのように評価しているのかを検証し、柳田の望む常民像を明らかにした。第一節では、評価を、積極面と、消極面の二面での評価を考察した。積極面では、教育目標が明確、子ども

の巣立ちをするシステムが備わり、人とつながりあう中での育みになっている等ある。消極面では、戦後の論文を用いて、「なぜ戦争に突入し、負けたのか」の反省から、常民の持つべき能力に問題があるとする。いやなことはいやとははっきり言える、善悪の判断を自ら主体的にでき、行動する等の能力が十分に備わっていない。大勢に従って行動する、大勢順応主義や雷同附和性、群れに従う性質とも述べ、厳しく批判をしている。第二節では、柳田は望ましい常民像をどのように描いていたのか。柳田は、人間のトータルな像を描くというよりも、個人として備えるべき能力は何かということを明らかにしている。それは、一つは、歴史認識としての史心の養成である。常民の歴史を知る必要性を説いている。もう一つは、国語の能力として、「表現力と判断力」を挙げている。心に思っていることを、言葉で、はっきりと表現する。そのためには、物事の善悪等の判断力を持つことが必要である。

第四章 以上のことを踏まえて、柳田の習俗研究の現在の意義を考察した。柳田の習俗研究を教育の中で注目した大田の取り組みも考えに含めながら、現在の意義を論じた。人づくりは時と所により変遷をする。それ故に、現在の課題に対して、一部の人の取り組みでなく、「国民共同の疑い」の中での課題解決とする必要がある。この思いをすべての国民が持つことで、新たな人づくりへの取り組みとなる。この思いの共同性こそが、現在の意義であると考えられる。

最後に課題として、常民の枠組みに含まれていない人々を含めた、人づくりのトータルな姿を描くことである。その点については、今後の課題として考察を続けていきたい。